れゆえに司書は専門職であると思う。しかしそのような努力は従来図書館の中だけで行われていたため、事業主や他の事務職員には知られていない。他部署の事務職員に図書館員とは何をするひとだと思いかと尋ねると、中学や高校の図書委員のイメージ（カウンターに座って本の貸し出しをするひと）で捉えていてがっかりすることがある。認定資格とは、医学図書館の司書とはどういう仕事なのかということを第三者の目に見える形にするためのものでもある。

また同時に、JMLAの認定資格が内輪で出し合っているお免状的なものではなく、意味のあるものなのだと外部から認識されるようになることも重要である。

AHIPのように読書プログラムやウェブベースの自己学習プログラムが用意されていることは、研修会に参加しにくい地方や小規模図書館の司書にはありがたいし、KMLAのように試験制度を設けるのは、司書のレベルを均等に底上げするのに有効であると思う。

大多数の司書が自己研鑽や職場の取り組みにより医学用語や専門知識の習得に励んでいるはずである。山崎氏の言う、「利用者の喜びを自らの喜びと出来る感性」のある図書館員が働き続けるためにも、この制度の意義が事業主のみならず社会的にも認知されるよう、図書館界を挙げて取り組んでいくことが必要だ。

第2分科会「患者図書室の必要性和設立のための問題点」に参加して

久田 睦美*

名古屋市立大学総合情報センター川澄分館

I. はじめに

第78回NPO法人日本医学図書館協会総会の第2分科会「患者図書室の必要性和設立のための問題点」に参加したので、その概要を報告する。司会は山口直比古氏（東邦大学医学メディアセンター）、話題提供者は大瀧博久氏（島根大学附属図書館医学分館）と、橋田圭介氏（高知県・高知市病院企業団立高知医療センター図書室、以下高知医療センター図書室という）、参加者は43名であった。また、総会組織委員会から高野史子理事（東京医科大学図書館）にお世話いただいた。

II. 問題の提示

最初に山口氏は、「患者図書室」を

- ・病院の中であって
- ・入院患者さんや外来患者さん、およびその家族を対象とし
- ・医学情報を提供する場所

であると定義し、患者図書室に必要なものとして「場所・

人・お金・資料・サービス」を挙げられた。平成16年、山口氏が59機関を対象として行った「患者図書室実態調査」（回収率78%）の結果報告後、「患者図書室は患者の知る権利を保障し、情報の面から患者の自己決定を支援するために必要である」と述べられた。

III. 事例報告

続いて2つの事例報告が行われた。

*Mutsumi HISADA : 〒467-8601 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地。
(2007年8月31日 受理)

1. 大学の立場から

まず、島根大学の事例を大瀧氏が報告された。医学図書館が構想を練り病院へ助言するという方法によって、平成17年2月にオープンした島根大学医学部附属病院患者図書室「ふらっと」の、構想から開室に至るまでと、現状、今後の課題についての報告であった。

島根大学医学部附属病院には、開設に至らなかったものの、平成12年の段階で患者図書室準備会を発足させたなど、早くから患者図書室に着目してきた経緯がある。平成16年9月に開催された同大学医学分館運営委員会において、患者図書室設置をめざし図書館主体で検討していくことが確認されてから、実現に向け具体的に動くこととなった。図書館からの提案を受け、附属病院は戦略委員会の中に病院図書室設置ワーキンググループを設置し、司書の非常勤職員を採用することも決定した。その職員と医学分館職員2名が中心となって開設準備に当たった。ブックカバーの貼り方を公共図書館の職員に教えてもらうなど、公共図書館の協力も得ての準備であった。

山陰地方で初めての本格的患者図書室であったことから、オープン時には地元のマスメディアに大きく取り上げられるなど反響を呼んだ。約25m²のスペースの二面に書架、中央に閲覧テーブルを配し、当初約2,000冊の蔵書とパソコン2台でオープンした。蔵書は医学の専門書は置かず、闘病記・健康図書・絵本・辞典等が中心で、公共図書館的要素の強い構成になっている。地域との連携も行っており、地元出雲市からの支援で新刊書を揃え、一般図書200冊は出雲市立出雲中央図書館の団体貸出を利用し、毎月1回入れ替えている。入院患者さんとその付添いの方には貸出も行っているが、プライバシーに配慮して、貸出には診察券番号を使用している。利用状況は1日の利用者が40人ほどで、約20冊の貸出がある。

オープンから2年半を経過した現在の蔵書は約3,000冊であり、スペースの拡大が今後の大きな課題となっているということであった。また、今後は患者会資料や各種パンフレットの収集、ボランティアの導入、看護師などのコメディカルスタッフの理解や協力を得ること、患者図書室の連携などを検討していきたいとのことであった。

2. 病院の立場から

続いて、県立病院と市立病院が統合され、PFI事業の導入による新しい形態の病院における患者・市民への医療情報提供の実例を高知医療センター図書室の橋田氏が報告された。

この病院は医療のコア部分を高知県・高知市病院企業団が、また、周辺事業を特定目的会社（SPC）がそれぞれ担い、両者が力を合わせて

1. 患者さんが主人公の病院にする
2. 高度な医療を普段着感覚で提供する
3. 自治体病院としての使命を果たす

という基本理念のもとに運営されている。さらに、

1. 医療の質の向上
2. 患者さんサービスの向上
3. 経営の健全化

という3つの基本目標を掲げ、この基本目標の1と2が図書館サービスに結びついているということであった。

高知医療センター図書室は2階外来エリア約230m²、蔵書約16,000冊の「なるほどライブラリ」と、医学雑誌等約20,000冊を備える「医療情報室」、「外部倉庫」（約15,000冊）の3ヶ所の総称であり、そのうち患者さんや一般の人に開放しているのが「なるほどライブラリ」である。この「なるほどライブラリ」は、医師や看護師のための医学図書館と患者さんのための患者図書室が合体したもので、誰でも利用できる施設となっている。職員は2名（うち1名は司書）で、このほかにボランティアも活動している。

患者さんが利用できる蔵書として、医学書611冊と一般図書8,583冊があり、インターネット端末5台も自由に利用できる。平成18年度の職員以外の利用は、1日平均62名、貸出は1日平均18名、89冊であった。ベッドサイドでも蔵書検索ができ、各病棟へのブックトラックによる巡回サービス、動けない患者さんには配達サービスを行うといったきめ細かなサービスをしており、各病棟には返却ボックスも設置されている。児童書や一般書は公共図書館からの貸与を受け、高知医療センター図書室からは医学情報提供で協力する等、公共図書館との連携も積極的に行っている。

「医療の主人公は患者さんである」という病院の考えのもと、「納得の医療」のため医療情報を提供しているということであった。

IV. 患者図書室の問題点と課題

2つの事例報告から、患者図書室開設にはまず病院側の十分な理解を得ることと病院内の適切な場所を確保することが必要であり、次にどの部署が主体となって設置し、誰が何を提供するのかという運営方針を明確にすることも必要であることが確認された。さらに、資料選定方針の決定、予算の確保、サービス内容の決定（貸出の

可否・インターネット環境提供の有無等)が必要になってくるとされた。

患者図書室の数は、医学・医療情報への社会のニーズの高まりを受けて、現在増加しつつあるが、人・資料・予算などの面でまだまだ十分な状況にあるとは言えない。また、患者図書室で提供される情報やサービスの質が問われるようになってきており、今後は大学図書館や公共図書館と連携するなどにより、社会全体が情報の面から患者さんを支える仕組みを作っていく必要がある。さらに、担当者間の横の連携を図り、情報交換をしながら底上げを図っていくことが不可欠である、と山口氏が最後に結ばれた。さらに、同氏が厚生労働省科学研究費の補助金を受けてまとめられた「患者図書室の設立と運営指針(試案)」^{注)}も紹介された。

V. おわりに

会場の参加者から「専任司書で運営するにはどうしたらよいか」という質問が出されたが、やはり病院長によく理解してもらうことが患者図書室開設運営のポイントであるように思われた。

名古屋市立大学病院でも、2007年5月、病院と大学図書館が協力して患者図書室「患者情報ライブラリー」を手探りのままにオープンしたばかりだったので、この分科会のテーマは私にとってたいへん興味深いものであった。

総会冒頭の基調講演の中で、元埼玉県立がんセンター総長武田文和氏は「患者は真実を知ってこそ自分の生き方を決められる」と話され、その言葉は私の心を強く捉えた。今回第2分科会の議論に触れ、“患者図書室の運営を通じて、患者さんが自分の身体の中で起こっていることを患者さん自身が客観的に知るためのお手伝いをする”ということは、患者さんの生き方の決定に深く関わることであり、患者図書室の果たす役割・責任の重さについて改めて考えさせられた。

注

この試案は以下の報告書に掲載されている。

緒方裕光. 患者／家族のための良質な保健医療情報の評価・統合・提供方法に関する調査研究. 平成18年度総括・分担研究報告書. (厚生労働省科学研究費補助金医療技術評価総合研究事業). 和光:緒方裕光;2007.

第3分科会「オープンアクセスと機関リポジトリ」参加報告

原 智子*

秋田大学附属図書館医学部分館

I. はじめに

第78回 NPO 法人日本医学図書館協会総会における第3分科会では「オープンアクセスと機関リポジトリ」という最近の、特に大学図書館において最大の関心事であるテーマが取り上げられた。

慶應義塾大学信濃町メディアセンターの酒井由紀子氏の司会により進行し、話題提供ではオープンアクセスと機関リポジトリについての研究者による解説と機関リポジトリを構築・公開している2つの大学図書館の事例発表が行われた。大学図書館関係者を中心に62名が参加した。

*Tomoko HARA : 〒010-8543 秋田県秋田市本道1丁目1-1.

hara@lib.akita-u.ac.jp

(2007年8月31日 受理)